

な處へ豆の皮を撒いとくのは、ちやんと捨りんかいナ。皆モウ良え加減に納まつて呉れんと叶わんなコレ其處の娘お前はどうか云ふ内へ行き度いのや」○「小父さん妾いな、月に二三遍芝居へ遣て呉れはつて給金は成る可く高ふて身體の樂うな内へ遣て欲しいね」番頭「コレそんなボロイ口が有るもんかい其方の娘、お前は何か云ふ内が望みや」△「あのなア小父さん。旦那はんと御寮人さんと二人限りで、御寮人さんの病身な内へ行き度いのや」番頭「ハハア。手の足らん内で、親切に病人さんの世話が仕度い、お前は何か願が有るのやな」△「イヤ小父さん左様やないね、御寮人さんが病身やと、何ふ仕ても旦那はんが箸まめに成てなはる。妾いにチヨイ〜悪戯しやはるのを黙て居るね。其内に御寮人さんは段々悪ふなつてコロツと死にやはる。妾いが直ぐ後へ直つて、前の御寮人さんの着物や頭の物を皆貰ふて、女中の二人も使ふてなア、清もよ云ふて、左り團扇で暮す意りや」番頭「ア何と悪い奴やなア。お家横領を企むでよる。コレ其方の娘、お前は何か云ふ先を探してのや」×「小父さん妾いは、何んな家でも關やしまへん。どうぞ小商ひを仕て居やはる内へ遣とくなはれ」番頭「フム。感心や。コラお家横領。茲へ來て此娘の云ふてる事を一遍聽いとけ。小商人の内へ奉公して、小商ひのコツを覺えたら、世帯を持た時に亭主の手助けが出來ると云ふ。あと〜の事まで手を廻した考えや」×「小父さん違ふ〜。小商ひする内へ往たら、小遣ひに不自由せえへん依つてや」番頭「ア斯奴は盗人やがな。一人として碌な奴は居やがらへん」番頭が呟いてる處へ、表から十二三の丁稚「小父さん

横町の十一屋から來たのや。別嬪の女婢さんを一人寄越してんか」番頭「何、別嬪の女婢やてか。毎時も成る丈け不容貌な娘と云ふて來るのに」丁稚「夫れが今日は違ふね。左様やけどなア、番頭はんは十錢貰ふて別嬪の女婢さん呼で來い云ふて、頼まれやへんで」番頭「コレ子供衆さん、お前番頭はんは十錢貰ふて、別嬪の女婢さん呼で來い云ふて、頼まれたナ」丁稚「アツ。小父さん、夫れ解るか」番頭「解らいでかい。お前の顔にチャンと書いたアるがな」丁稚「エツ。書いたアるか小父さん。誰が書きやがつたんやろ。(手拭を出し唾を付けて拭く)ほんならなア。今日内の奎平どんが若芽の味噌汁嫌ひや云ふて、揚昆布買ふて來て御飯食べはつたか、何ふや、知てるか」番頭「そんな位はエラ解りや。奎平どんは若芽の味噌汁が嫌ひで、揚げ昆布で御飯を食べはつたやろ」丁稚「ア、小父さん、何でも能う知てるなア、鳥渡手の筋見てんか」番頭「阿呆云え、其處に仰山女婢さんが居るがナ。良え娘を連れて去に」丁稚「ホンに仰山居よるなア、そやけど皆おもしろい顔ばつかりや。ア、此娘この間宅へ來て、ツマミ喰ひして去なされた娘や」番頭「コレ其んな事云ふ物やない」丁稚「其處に俯向いて人。チヨツと此方を向いとくなはれ。ア、貴女途方も無い別嬪さんや、貴女内へ來とくなはれ、小父さん此人來て貰ふで」番頭「ア、左様か諾しや。貴女此子供衆さんと一緒に往とくなはれ、横町の十一屋と云ふ古着屋さんぢや。何れ後から私が判を貰ひに往くでなア」女中「夫れでは往て参ります」丁稚「サア誰方も退いとくなはれや。内の女婢さんのお通りだつせ、サア退いた〜、貴女大きに御苦勞さんでおます、貴女